

は悲しむ

同

二ツ三ツ取りのこされし柿の實の色さむげなり冬の

山畑

太田 赤童

たゞ一つ濡れたる如く光る星の君があゝの夜のまなざしににて

同

母の手にポタリとをちる涙見ていすまいなほす小さ

き妹

同

北國の空をながめて今日も又母と妹としみじみと思

ふ

同

ひぐらしの聲もかそける啼ける日を友病むと聞き涙

すわれは

同

思 出 草

前の世は兄弟ならめ此の二人あまりに奇しき運命なるかな

今泉 智 旭

語らひの重なる程に運命のあまりに似たる二人なる

かな

同

此の惱み此の愁だになかりせば永久に二人知らざり

しならめ

同

同じ道同じ惱みを辿り來て佛の仕ふる奇しき縁

よ

同

しつしつと生命の壺を捧げてゆく手おのゝきし若き

日のわれ

太田 赤童

低唱はうちさびしくもしみじみとわが聲ふるふ悲し

みのわく

花島 涙草

明 暗

必ずも僧侶であつて呉れませよ辛棒しませごはげませり君

今泉 智 旭

魔の神のいごゝ我が身を襲へごも我は動かじ心やす

かれ

同

うづ高き文にうもるゝ法の子の末の望みは燈臺の

守

太田 赤童

寺平一本松のもとに來て傾きくるゝ夕日をぞ見る

る

同

曉の雲たなびける山の嶺の晴間より見ゆ眞白き美女

がれ

同

讚經のこえ波うつゝ朝堂の光影もれ來し朝のたうと

ささ

江原 白線

樵夫は斧をおさめて歸り來む鳥はねぐらに我はこゝ

ろに

同

老ひの身に星を頂き月を踏む野山の業もわ子を思へ